

ホロホロ鳥飼育試験

渡辺 芳文・吉田 晶二・馬場 俊明・諏訪内博之

(青森県養鶏試験場)

Feeding Tests of Guinea Fowl

Yoshifumi WATANABE, Shōji YOSHIDA, Toshiaki BABA and Hiroyuki SUWANAI

(Aomori-ken Poultry Experiment Station)

は し が き

最近、ホロホロ鳥が、新しい実用家禽肉として注目され、我が国でもその卵肉が、家禽中最も美味と言われることから、高級料理用として各地で飼養されている。この鳥は鶏とくらべ、強健で、しかも牧草類等の低質飼料の利用性が高く⁴⁾、半自然環境下での粗放飼育にも十分耐えると言われている。これらの特徴をもったホロホロ鳥を、飼料費および労力の節減を目的として、実際に緑餌を栽培したコロニーに放飼した場合の成績、また、プロイラー的に終夜点灯によって短期間に肥育可能かについてそれぞれ検討し、あわせて、この鳥の解体成績を調査したので報告する。

1 放飼試験

試験方法

昭和53年7月20日、当場でふ化した無鑑別のホロホロ鳥180羽を供試鳥とした。試験区分は、5~14週令間の濃厚飼料の給与割合、100%、85%、70%の3水準についての一円配置法で実施し、各区とも供試羽数は、60羽の2反復とした。供試育成施設は、餌付から5週令までは、全羽数区別なく電熱式立体育雛器(間口86cm×奥行226cm×高さ28cm)で飼育し、5週令時でランダムに3区に分け、14週令まで放飼した。放飼場は、図1に示す広さのコンフリーを栽培したコロニーを使用し、ここを半分仕切り、2週間毎に放飼場所を交換し、生草の生長回復をはかった。なお、100%濃厚飼料給与区(基準量区)は、雑草を刈払った後に放飼した。供試飼料は、餌付から4週令までは、前期プロイラー用飼料CP22%、ME3030kcal/kg、4週令~14週令までは、後期プロイラー用飼料CP18%、ME3030kcal/kg、及び制限区(85%区と70%区)は、コンフリーを自

由摂取させた。試験期間は、昭和53年8月24日(5週令)~昭和53年10月25日(14週令)とした。

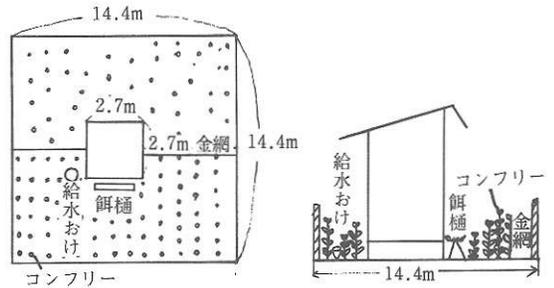


図1 放飼場

試験結果および考察

餌付から5週令までの育成率は、全体で98.0%と良い成績であったが、5週令以降の放飼場での事故死は、主にカラスによるもので、コンフリー等の遮蔽物のない基準量区に集中した。外敵による事故死以外の放飼場での生存率は、各区の間に有意な差はなく、また、放飼環境に順応するまでに、脚部の外傷や骨折等で淘汰した以外に、病鳥はみられず、強健な鳥であると言える。10週令時体重は、濃厚飼料給与量に比例して、各区の間に1%水準で有意な差が認められたが、14週令時体重は、基準量区と85%区に有意な差はなく、70%区のみ有意な差が認められた。5~14週令間の増体量、増体率についても同じ傾向がみられた。試験期間中の濃厚飼料摂取量、飼料要求率は、表1に示すとおりで、各区の間に1%水準で、有意な差が認められた。これらの成績を総合してみると、放飼前半は、濃厚飼料摂取量に比例して、体重に有意な差が認められたが、後半になると、その差は縮小され、濃厚飼料摂取量の制限比ほど

表1 放飼試験成績

項目	体 重 (g)			生 存 率 (%)	5 - 14 週 令				
	5週令時	10週令時	14週令時		事故死数 (羽)	増 体 重 (g)	増 体 率 (%)	飼料摂取量 (g/1羽)	飼 料 要 求 率 (%)
基準量区	439	934a (100.0)	1,274a (100.0)	98.4	17	835a (100.0)	1.90a (100.0)	4,254a (100.0)	5.11a
85%区	437	845b (90.5)	1,264a (99.2)	96.7	4	827a (99.0)	1.89a (99.5)	3,459b (81.3)	4.21b
70%区	434	717c (76.8)	1,122b (88.1)	94.9	2	688b (82.4)	1.59b (83.3)	2,859c (67.2)	4.15c

a, b, c 異文字間に1%水準で有意差あり。

体重に差はなくなり、制限区は、増体重に関して、緑餌摂取によるカバーがなされたと考えられる。このことから、育成期後半の増体重の鈍る時期から濃厚飼料を制限し、放飼により緑餌摂取させることが、有効であることが示唆された。

2 点灯処理試験

試験方法

昭和53年6月17日、当場でふ化した無鑑別のホロホロ鳥131羽を供試鳥とした。試験区分は、5~14週令間の濃厚飼料給餌法について、自由摂取と80%給餌の2水準、また、同期間の点灯処理法について、終夜点灯と自然日長の2水準についての2元配置法で実施し、各区とも、供試羽数は32~34羽の2反覆とした。供試育成施設は、餌付から5週令までは、放飼試験と同様に飼育し、5週令時でランダムに4区に分け、間口86cm×奥行76cm×高さ36cmの中籠用ケージに1ケージ当り5~6羽を、14週令まで飼養した。供試飼料も、放飼試験の時と同じプロイラー用飼料を使用し、80%給餌区については、ラジノクローバーを飽食させた。なお、餌付から5週令までは、全羽数自然日長下で自由摂取させた。試験期間および点灯期間は、昭和53年7月

21日(5週令)~昭和53年9月15日(14週令)とした。試験終了後、各区からランダムに15羽ずつ抽出し、昭和53年9月26日(102日令)でと殺し、その解体成績を調査した。

試験結果および考察

表2に示すとおり、餌付から5週令までの育成率が、低かったのは、弱ひなによるものである。試験期間中は、ケージに首を引っかける事故死以外、死亡するものがなく、大変強健な鳥であると言える。14週令体重、5~14週令間の増体重、増体重率は、飼料給餌間に1%水準で、有意な差が認められたが、点灯処理法間には認められなかった。試験期間中の1羽当りの濃厚飼料摂取量及びその摂取量から算出した飼料要求率は、表2に示すとおり、摂取量については、飼料給餌法、点灯処理法間に、1%水準で有意な差が認められたが、飼料要求率については、飼料給餌法の間のみ、1%水準で有意な差が認められた。解体成績については、処理方法別及び性別による有意な差は、どの部位についても認められなかったが、腹腔内脂肪量については雌の方が若干多い傾向がみられた。枝肉歩留りは、雄74.0%、雌75.1%、正肉歩留りは、雄44.7%、雌46.1%とプロイラーや比内鶏の成績^{1,2,3)}と比べ、歩留りが良かった。

表2 点灯処理試験成績

濃厚飼料割合	点灯処理方法	体 重 (g)			1~5週令 育成率 (%)	5 - 14 週 令 生存率 (%)	増 体 重 (g)	増 体 率	飼料摂取量 (g/1羽)	飼 料 要 求 率
		5週令時	10週令時	14週令時						
100%	終夜点灯区	457	1,081	1,464a	93.6	100.0	1,007a (102.3)	2.20a	4,693a (104.2)	4.66a
100%	自然日長区	448	1,103	1,429a		97.0	984a (100.0)	2.22a	4,502b (100.0)	4.58a
80%	終夜点灯区	445	1,048	1,375b		96.9	927b (94.2)	2.07b	3,496c (77.7)	3.77b
80%	自然日長区	438	1,058	1,343b		100.0	907b (92.0)	2.00b	3,424c (76.1)	3.78b

a, b, c 異文字間に1%水準で有意差あり。

この点灯試験の目的は、ホロホロ鳥を点灯処理によって摂取量を増加させ、プロイラー的に短期間での肥育効果を期待したものであり、あわせて、緑餌摂取量も点灯によって増加させ、増体重に寄与する緑餌の率を高めようと思図したものであるが、点灯による有意な差として認められたのは、濃厚飼料摂取量の増加だけで、これが、直接増体重と結びつかず、飼料要求率では、逆に点灯区が悪い結果となった。また、点灯による緑餌の増体重への効果も変らなかった。このことから、この時期(日長時間が割合長い時期)においては、終夜点灯によって、自然日長飼育よりホロホロ鳥の肥育を早めることは難しいように思われる。

要 約

新しい実用家禽として注目されているホロホロ鳥について、飼料費および労力的節減を目的とした放飼試験と終夜点灯による短期肥育を目的とした点灯処理試験を実施した。その結果、増体重の大きい育成期前半(10週令まで)に、

ケージ飼育によって濃厚飼料を飽食させて増体を早め、増体重の鈍る後半(10週令以降)に、濃厚飼料を制限し、放飼により緑餌を自由摂取させることによって、管理労力的な面でも、飼料費の面でも、節減が可能であることが示唆された。また、日長時間の長い時期においては、終夜点灯によって、ホロホロ鳥の肥育期間を短縮することは、難しいと思われた。

引 用 文 献

- 1) 奥野秀樹・馬場俊明・岡田久・貝森一夫・吉岡重治郎. 比内鶏の利用に関する試験. 青鶏試研報, 28-36(1975).
- 2) 佐伯祐武・田名部雄一・姫野健太郎・葛城俊松. プロイラー用鶏の育種に関する研究. 日畜会報 34, 69-72(1963).
- 3) 高安一郎・豊川好司. 比内鶏に関する研究. 弘大農学報 17, 70-78(1971).
- 4) 渡辺芳文・吉田品二・馬場俊明・諏訪内博之. 自給飼料によるホロホロ鳥飼育試験. 青鶏試研報 15, 65-72(1978).